

原爆忌を迎えて

「一枚の絵から」

— 高校放送部の番組取材活動を通して平和を考える。 —

天野 紘

長崎原爆資料館の屋上庭園に、大空に舞う二人の少女の「未来を生きる子ら」の像が建っている。この像は一枚の絵をきっかけに建てられたのである。

その絵とは現在長崎市滑石町におられる松添博さんが描いた「悲しき別れ―茶毘」であり、原爆資料館内に展示してある。

この絵を松添さんが描いた経緯については像の碑文に次のように記してある。

『…けが人や死体には驚かないようになっていた私が、忘れえない情景を見たのは、昭和二十年八月十九日の事でした。爆心地より約四km離れた滑石の打坂というところの畑の中で二人の少女が、積み上げられた木材の上に寝かせてありました。十歳前後で、私は姉妹であろうと思っておりました。あの頃見たこともない立派な着物を二人とも着ており、先ずその着物のあまりの美しさに私は我を忘れて見とれていました。顔を見るときどこにも傷のあととはみられず、薄化粧をしており、その顔の美しさにも息をのんで見ました…』

昭和四十九年、被爆三十周年を前にして松添博さんは絵筆を握った。

この「一枚の絵」からドラマは始まっている。

○「番組を作る」

私は今年の三月まで十四年間長崎北高校に勤め、その間放送部の顧問として、生徒に長崎原爆をテーマにした番組づくりを指導してきた。平成十五年の番組打合せ会のとき



— 未来を生きる子ら —
ふりそでの少女像

のです」と綴っておられた。

故郷の綾部市に帰った志なさんは、毎年、修学旅行で広島を訪れている綾部中学校の生徒に千羽鶴を届けられていた。

平成七年、戦後五十周年の春、志なさんは折り鶴とともに「長崎に平和を祈る地藏尊を建てたい」という手紙を出した。それをきっかけに、綾部中学校の生徒会で募金活動が始まり、そして「ふりそでの少女像をつくる会」ができた。生徒たちは綾部の街頭に立ち市民に募金を呼びかけた。その活動を知った地元の新報は募金の様子を大きく報道し賛同の輪は全国に広がった。当時、綾部中学校の教師で事務局を担当されていた伊達先生宅の電話には全国から募金の報せが相次いだ。

母の悲願は、長崎にブロンズ像を作ることではかなえられた。像の制作を担当した舞鶴市の美術教師余江勝彦氏は、「ナガサキの青い空を自由に舞う二人のふりそでの少女をイメージした」と語る。制作期間は平成七年の十一月から翌年の二月まで、舞鶴の冬はとて厳しく、制作には困難を極めたと言われた。

○「像の除幕」

平成八年三月三十一日、像は長崎原爆資料館屋上庭園に建てられ「未来を生きる子ら」の像と名付けられた。除幕式には志なさんをはじめ綾部中学の生徒ら八十名が出席した。涙を浮かべながら志なさんは「私の小さな願いが輪となってこの日を迎えることができました。全国の皆さんありがとう」と頭を下げた。被爆五十一年目の春であった。

「未来を生きる子ら」の像の碑文には次のように記されている。

『像をつくって終わるのではなく、そこから世界へ平和を考える輪を広げたい。そんな私たちの思いに共感してくださった全国の方々の支援と、像制作にたずさわった多くの方々熱意と努力によって、像は完成した。核兵器のない自由で平和な世界を願い、ナガサキから世界の青空へと舞い上がる二人の少女によって、人々の思いは一つに結ばれた。この像がつけられた道のりこそ、平和な未来をつくる真実の道だと私たちは確信する。』

そして今年平成十八年四月一日、「未来を生きる子ら」の像の建立十周年の集いが、原爆資料館の屋上庭園で行われた。ふりそでの少女は今日もナガサキの空に舞っている。

(元長崎県立北高校教諭)

部員たちが小学校の時に読んだ「ふりそでの少女」のことが話題となって、之れを主題にテレビ番組を作ろうと言うことになった。

そこで先ず「悲しき別れ―茶毘」の制作者松添博さんに連絡を取り協力をお願いした。そして松添さんの話より原爆でなくなられた二人の少女の母親福留志なさんが京都府綾部市でご健在であることを知った。そこで、私達は、前述の松添さんの絵画より「ふりそでの少女像をつくる会」の事務局長伊達順子先生とも連絡をとり、私と放送部の生徒二人が綾部市に取材に行くことになった。

当時、志なさんは百歳になられ綾部市の老人福祉施設「丹の国苑」におられた。志なさんは、とても元気で私達を心よく迎えて下さった。志なさんは先ず「私が松添さんの描かれた吾が子の絵を初めて見た時はびっくりしました」と言われ、続いて戦争、原爆、平和についての話等、歳を感じさせない口調で取材に答えて下さった。

この取材によって私達は「未来を生きる子ら」の像」の制作経緯を知ることができた。

昭和四十九年「悲しき別れ」の絵を描いた松添さんは、昭和六十三年二人の少女が当時十才の福留美奈子と十二才の大島史子である事と美奈ちゃんの母親が前述した福留志なさんである事を知った。

昭和二十年被爆当時、志なさんは夫の仕事の関係で中国上海にいたので長女美奈子は長崎に居た義兄に預けていたと言う。それで美奈子が原爆で死んだ事を知ったのは戦後日本に戻ってからだったので、松添さんの絵をはじめて見たときのことを

「娘は原爆でめちゃくちゃになって死んでいると思っていたのに、それが、こんなに綺麗にしていたら…びっくりして声も出さず泣いていた

風信

○七月二十三日は前回も記したように昭和五十七年長崎大水害の日であり、私達歴史文化協会の創立は其の年の五月であったので、此の大水害の思い出は特に深いものがある。

○次に七月といえば七月七日のタナバタの日であるが、私達年令の者にとってはタナバタと言えはツユがあけた初夏の行事との印象が深い。因みに旧暦にいう七月七日は七月三十一日との事であった。

○先日、九州調理専門学校に行き川島明子校長より新しく認定される「介護食士」資格の話聞いた。今後は福祉介護の調理に携わる人達は之の資格を取得せねばならぬとの事。現代食の文化は種々とむつかしい学問資格を必要とする時代となってきた。

○我が国写真術の祖上野彦馬翁の御子孫で、現在産業能率大学最高顧問をしておられる上野一郎先生が、上野家墓域が市文化財史跡指定に認定された報告の事もあって来崎され、東京大学馬場章教授を中心にして編集された「上野彦馬・歴史写真集成」を持参して下さいました。之を読むと彦馬父子が我が国近代科学の発展に如何に貢献してきたかと言うことが整然と記されていた。(渡辺出版刊・二八〇〇円)

○竜谷大学安藤幸二先生来訪され、同大学林智康教授が中心となられて編集された「親鸞事典」を寄贈して下さいました。私は今まで親鸞聖人の伝記は多く読ませて戴いたが、今回の「事典」ほど物しずかに、文化史としての親鸞を詳述してあるものには初めて接した。良い本であった。(柏書房・三二〇〇円)

○長与町教育委員会より「長与三彩発掘調査報告書」を戴いた。同書の編集は同教育委員会の中村幸学芸員の編集とあり、主論文としては活水大学下川達弥教授の「長与焼について」の論考があった。長崎の陶芸史を研究される方々は一読しておかねばならぬ報告書であろう。

○一昨日長崎市自治労連の湖上剛幸氏が来訪され「長崎市役所九条の会」を結成するので「挨拶に来なさいよ」と言葉をかけて戴いた。

